親と進路に関する自伝的記憶の感情価に関する研究

○兵藤宗吉¹・佐藤研一郎²

(中央大学文学部¹・中央大学大学院文学研究科²)

キーワード：自伝的記憶 親 進路

The effect of affect value of autobiographical memory

Muneyoshi HYODO, Kenichiro SATO

(¹Faculty of Letters, Chuo University., ²Graduate school of Letters, Chuo University.)

Key: autobiographical memory parent, career

問題・目的

自伝的記憶と感情との関係については Waldofoegel(1948)や 斉藤(1991,1992,1994) により、大学生、中学生、小学生、高齢者らを対象に研究が行われ、想起された児童期の出来事の感情価に従い快・不快・中立に分類すると、ほぼ、一定して 5:3:2 の割合になるという結果が得られた。しかしながら、全く異なる結果も報告されている(神谷,1993、太田、智,1995)。すなわち、不快、快、中立の順位なるという結果である。それらの結果を踏まえて、兵藤(2003)・兵藤・野内(2004, 2005, 2006)は、忘却の視点から 5 分という短い想起時間を設定し大学生を対象に、「小学校」、「中学時代」、「高校時代」、「大学時代」といった「時期」を手がかり語にして自伝的記憶内の出来事について想起させた結果、その割合は、快、不快・中立の順に、ほぼ 5:3:2 であることを確認した。

その後、「時期」ではなく「クラス」や「部活」といったテーマを手がかり語にして研究を行ってきた。自伝的記憶と感情との関係について、兵藤(2003)・兵藤・野内(2004, 2005, 2006)は、忘却の視点から 5 分という短い想起時間を設定し大学生を対象に、「小学校」、「中学時代」、「高校時代」、「大学時代」の出来事について想起させた結果、その割合は快、不快・中立の順に、ほぼ 5:3:2 であることを報告した。

本研究では、「親」と「進路」といったことばを手がかり語として記述された自伝的記憶と感情価との関係を検討した。さらに出来事の記述前後の気分変化を調べることで、自伝的記憶の感情制御の効果も検討した。

方法

参加者：大学生 56 名(男性 27 名、女性 29 名)が実験に参加した。平均年齢は 21.25 歳であった。

デザイン：2(出来事のテーマ：進路、親)×3(出来事の感情価：快、不快、中立)の 2 要因被験者内計画であった。

実験冊子：フェースシートと気分評定用紙 2 枚(出来事の想起前後)、出来事を記入する用紙をテーマ(進路、親)ごとに 1 枚ずつ、および自伝的記憶の評定方法(感情価、体験した時期)が書かれている用紙 1 枚の計 6 枚(A4 サイズ)を順番にまとめて実験冊子とした。実験冊子は出来事のテーマを入れ替えた 2 パターン作成した。

気分評定尺度：寺崎ら(1992)の多面的感情状態尺度を元に気分評定尺度を作成した。ポジティブ尺度 9 項目とネガティブ尺度 9 項目の計 18 項目からなり、全ての項目は、5 件法で答えさせた。

手続き：大学の講義の時間を利用して集団法で実験を行った。参加者に実験冊子を配り、実験者の指示によって実験を行うことを伝え、フェースシートに記入させた。その後、自伝的記憶想起前の気分状態を測定した。全員が回答したのを確認した後に、5 分間ずつ親・進路に関する出来事のいずれかを出来るだけ多く想起させ、想起した順番に実験冊子に記入させた。その際に、出来事のテーマの順番は参加者間でカウンターバランスをとった。その後、その出来事に対して現在どのように感じているかについて“1.とても不快”から“5.とても

快”の 5 段階で、その出来事がどの時期に起こったのかについては“1.小学生未満”から“5.大学生”の 5 段階で評定させた。最後に、自伝的記憶想起後の気分状態を測定した。実験時間は 20 分程度であった。

結果

出来事の感情価 出来事の総記述数は 696 個(親に関する出来事の記述数 306 個、進路に関する出来事の記述数 390 個)であった。出来事の平均記述数は、「親」で 5.46 個「進路」で 6.96 個であった。出来事に対する現在の感情価評定のとても快・少し快を“快評定”とし、少し不快・とても不快を“不快評定”とし、中立を“中立評定”とした。テーマ×感情価ごとの平均想起率を表 1 に示した。

想起された進路に関する出来事の感情価ごとの記述数について、1 要因 3 水準(感情価：快、不快、中立)の分散分析を行った。その結果、主効果はみられなかった ($F(2,110)=1.33$, ns)。想起された親に関する出来事の感情価ごとの記述数について、1 要因 3 水準(感情価：快、不快、中立)の分散分析を行った。その結果、主効果が有意だったため ($F(2,110)=9.12$, $p<.01$)、Ryan 法による多重比較を行ったところ、快と中立、快と不快に有意差がみられ ($p<.05$)、快の感情価を持つ出来事は中立や不快な感情価を持つ出来事よりも多記述された。

表1 出来事の内容と感情価ごとの割合

親			進路		
快	不快	中立	快	不快	中立
0.48	0.28	0.24	0.35	0.29	0.36

考察

想起された自伝的記憶の感情価について分析したところ、「進路」については、感情価の影響は見られず、快と不快の割合がほぼ同じで中立がやや低いという結果になった。すなわち、快：不快：中立が 3.5:3:3.5 である。それに対して、「親」に関しては、快が不快と中立より有意に高いという結果であり、割合は、ほぼ 5:3:2.5 となった。これらの結果は、「小学校」や「中学校」といった「時期」を手がかり語にした自伝的記憶の実験結果とは異なる結果である。すなわち、快：不快：中立の割合が 5:3:2 といった安定した結果ではなく、「テーマ」によって、その割合は異なるということである。参加者が「時期」を手がかり語にして自伝的記憶内の出来事を想起する時には、その時代に関する様々なテーマに関して想起するが、自伝的記憶内において、それらの「テーマ」に関する「重みづけ」が異なると考えられる。すなわち、例えば、「小学校」といった「手がかり語」を見たときに「活性化」される「テーマ」は、本研究のように「親」など快感情素が結びついた出来事が想起されるのに対して、「親」や「進路」といった「テーマ」を手がかり語にして自伝的記憶内の出来事を想起させると自伝的記憶の最も低いレベルの出来事の表象が活性化されると考えられる。今後は、モデルとの関連で上記の仮説についてより精緻な検討をする予定である。気分評定に関しては別の機会に報告する。